

コミュニケーションツールとしての「コスプレ」——『世界コスプレサミット2009』見聞記

山田 健一朗

「尾張名古屋は城で持つ」とよく言われる。

しかし、いまや「尾張名古屋はコスプレで持つ」というてもいいのかもしれない——。

それほどまでに夏の名古屋を盛り上げるイベントが、『世界コスプレサミット』なのである。

本年(2009年)に第6回目を迎えたこのイベントは、二日間にわたる大規模なものである。本年は第1日に名古屋の大須商店街を練り歩く「コスプレパレード」が、第2日には「コスプレチャンピオンシップ」が開催された。メインイベントである「コスプレチャンピオンシップ」には、世界15カ国ものコスプレイヤーらが参加し、その完成度を競いあい、大勢の観客と応援団で盛り上がった(写真1参照)。なお、アニメ・特撮番組の主題歌を多く手がけた水木一郎や、声優としておなじみの古谷徹、そして『マジンガーZ』や『ハレンチ学園』で有名な漫画家永井豪など著名なゲスト審査員が花を添え(水木一郎のライブもプログラムに含まれていたのも筆者にはポイントであった)、イベントとしてはかなりの熱の入れようであった。

このように名古屋の夏を大いに盛り上げるこのイベントは、もとは「世界各国でマンガ・アニメをきっかけに日本に憧れをもっている若者が増加していることを日本国内に紹介しようと、テレビ愛知が2003年「MANGAは世界の共通語」という番組を制作・放送し」たことを発端に、「マンガ・アニメが「好き」という気持ちを視覚的にわかりやすく表現している海外コスプレイヤー達を日本へ招待し交流を図ったのが始まり」であるという(世界コスプレサミット公式サイト <http://www.tv-aichi.co.jp/wcs/what/history.html> より引用)。初めて開催された2003年当時は、名古屋を代表する

商店街、大須で開催され、参加国はドイツ・イギリス・フランスの3カ国のみという比較的小規模なイベントであった(ただし、それでも視聴者からの反響は大きかったようだ)。

しかし、年を追うごとに参加国・グループが拡大し、しかもそれは欧米諸国をはじめ、中国・韓国・タイなどのアジア圏、さらにはブラジルを中心とした南米諸国からの参加チームも加わり、まさしくグローバルなイベントして急成長を果たしている。このため『世界コスプレサミット』は、もうひとつの名古屋の夏の風物詩である「日本ど真ん中祭り」と並び、多くの市民とメディアを巻き込んだ一大エンタテインメントとしてその存在感と注目度を高めてきている。

しかも、現在は単なる一地方都市のイベントとしてではなく、日本のアニメ・コミックなどを通じて他国との文化交流に力を入れる外務省も主催者の一員に加わっている。まさしく、国の「お墨付き」のイベントなのである。すなわち、コスプレを通じた異文化交流の国家的プロジェクトとしての性格と地位を獲得しているわけである。

さらに今年は二日間の『世界コスプレサミット』終了後に、名古屋大学において、コスプレに関する国際シンポジウムも開催され、学術的見地からのコスプレの可能性についての論議も行われた(写真2参照)。もはやコスプレは、単なる時代のトピックではなく、研究に値する文化現象の一主潮としてとらえる時機に来ているのである。

さて、私も今回初めてこのイベントを生で見る機会を得たのだが、どこの国のコスプレイヤーも日本のアニメやコミックを实によく読み、その世界観を十分すぎるほどに理解していることにまず驚かされた。中には、日本

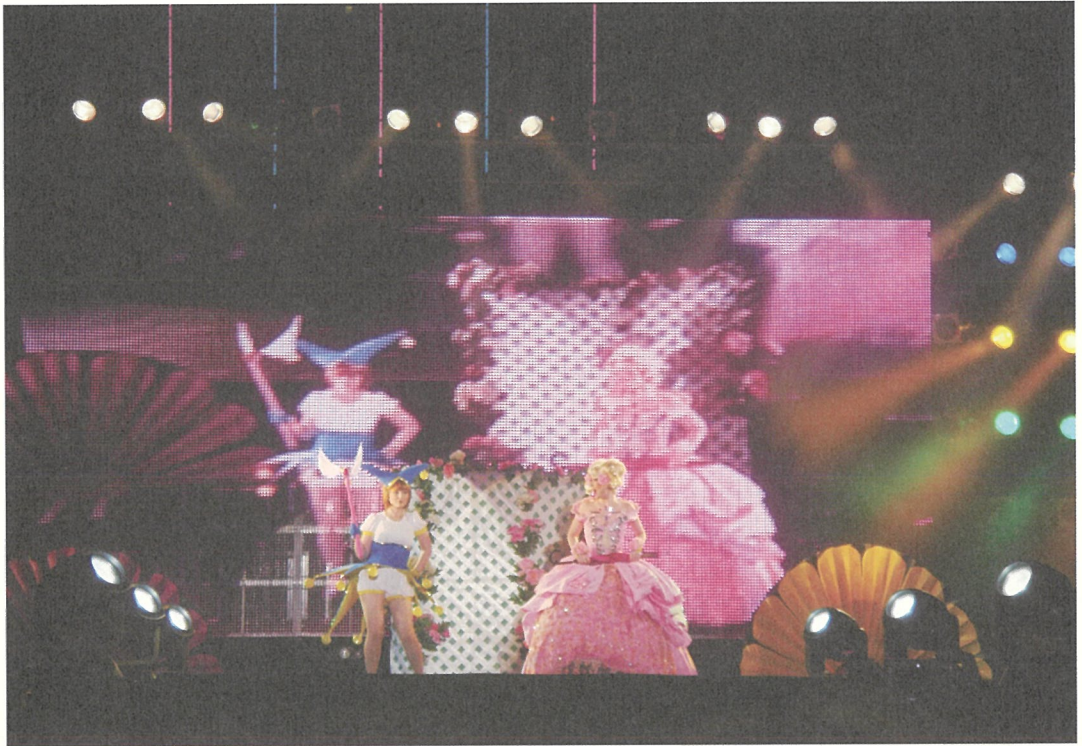


写真1 「コスプレサミット」当日の様子。(2009年8月2日名古屋、オアシス21にて)

人である私ですら、今回このイベントを通じて初めてその存在を知ったアニメやコミックも多々あった。まさしく「目からうろこが落ちた」体験であった。逆に言うと、それだけ日本のアニメ・コミックは複雑化、細分化し、それぞれコアなファン層に熱烈に支持されることにより巨大な市場を網の目状に形成していることがわかってくる。

ところで「コスプレ」というと、私の中には(というよりも一般的なバイアスとして)「オタク」というイメージが付きまわっており、正直なところ、セクシュアルなものとしてのイメージを強く抱いていた。

だが、そもそも「コスプレ」とは「コスチュームプレイ」の略称であるように、そこには「装う」というニュアンスが色濃く漂っている。それに、日本文化における、古くからの「変装」の系譜を例にとってみても、人間の心性として、自分とは別の何かを「装う」ことへの希求が存在してきたことが裏付けられよう。たとえば平安時代後期に成立した『とりかへばや』は、男女の性を転換することによって成立する物語だ。また、現在でも多くの支持を集める歌舞伎は、「女形」という女装者の存在が重要な役割を担っているし、宝塚の「男役」だって、女性が男装することによって生じる美が売り物である。

つまり、人間は、歴史的に、半ば意図的に自分の性を転換することによって表現することの喜びを知っていたのだといえる。それは人間の心性ともいべきものであり、いわば、人は「装う」ことによって、自分ではない自分——「もう一人の自分」を求める欲求が潜んでいるのであり、「コスプレ」はそうした「もう一人の自分」を見つけ出す恰好の転換装置として機能したのである。

その点について、音楽社会学者の小泉恭子は次のように分析して見せている。

ヴィジュアル・コス・カルチャーは、ジェンダー・ステレオタイプな「少女のファッション志向」という切り口からだけでは語りつくせない。…それは本人たちのセクシュアリティとはひとまず切り離された行為であり、けっしてトランスヴェスティズムと同一視されるものではない。ヴィジュアル・コスのイメージネーションの多様性はそのまま、日本の少女サブカルチャーの層の厚さを物語っている。

(「異性を装う少女たち」 井上貴子ら編『ヴィジュアル系の時代』青弓社 2003年所収)

そう、コスプレとは、単に性的嗜好や趣味の問題だけでは語ることはできないのである。

それより重要なことは、コスプレイヤーたちは「装う」だけでなく、いつも観客が自分たちを「見る」ことを意識していることである。「コスプレ」は、「変身」した自分の姿を他者に見せる装置でもあるのだ。だから、コスプレイヤーたちは、アニメやコミックのキャラクターの服装だけではなく、髪型、肌の色にはじまって、アクセサリやしぐさや口癖に至るまで、ありとあらゆる人間の属性を、すべてキャラクターへと「変身」させ、その「変身した」自分を観客に見てもらう。「見られる」ことで喝采を浴び、そのことが「コスプレ」という「もう一人の自分」を成り立たせる重要な要素なのである。「装う」ことで「見られる」という快感であるからこそ、一歩でもそのキャラクターに同一化しようと必死になるのである。「装う」者と「見る」者同士が相補しあって「コスプレ」という文化潮流を成り立たせている。

そういう意味で「コスプレ」を研究対象とする場合、前出の小泉の言うように、セクシュアリティの問題としてのみ説明のつく現象ではもはやなくなっていることは明白だ。また、サブカルチャー／ハイカルチャーという二元的な捉え方でくることが容易ではないことも明らかだろう。

もちろん、そうした枠組みも分析の視点に欠かせないが、私は、「コスプレ」を分析するには、それ以外に、コミュニケーションツールとしての「コスプレ」という視点を想定する必要があるような気がする。

そう思うようになったのは、二日目の『コスプレチャンピオンシップ』当日に、印象に残った出来事があったからである。

私の目の前に座っていた観客——天使の羽根に真っ白の衣装に身を包んだ女性のコスプレイヤーであったが（何のキャラクターであるかは、不覚にも不明）——が、その隣にやってきた外国人の二人組の女性に「お久しぶりです、お元気でしたか」「お久しぶりです、ああ、あの時の…」などときさくに声をかけ、互いの再会を喜び合っていたのである。なるほど、彼（彼女）らは、ただ「コスプレ」を通じて「もう一人の自分」になりきり、それ自体を喜んでいるのと同時に、「もう一人の自分」を追究する者同士の友情を、国境を越えて交歓しあうことにも、「コスプレ」の意義を見出そうとしているのであるまいか。

だとすると、「コスプレ」とは、ただ「装う」ことにより自らの好きなキャラクターに同一化する喜びを味わうだけではなく、「装う」ことによるコミュニケーションネットワークを構築し合っているものだということになる。

このように、自分を「装う」ことで終わるのではなく、「装う」ことを通じて他者との関係を構築しあう——これまでのコミュニケーションには見られなかった新しい意思疎通の形がそこにあるような気がする。すなわち「コスプレ」とは、アニメ・コミックのキャラクターと同一化することによって、自分の中の殻を破るだけではなく、国境をも乗り越えることができるのだ。「コスプレ」は今や世界をつなぎ、新たな友情をはぐくむための、重要なコミュニケーションツールとして定着してきているのではないかと思う。

研究者たちは、そうした事実を受け止め、単なるセクシュアリティの問題としてのみ処理するのではなく、はたまた、サブカルチャーの範疇のみでとらえるのではなく、むしろ自己表現とコミュニケーションツールの一つの主潮としてとらえ、より批判的で重層的な考察を加えるべきであることは言うまでもない。

「コスプレ」の示す現実とは、グローバル化する社会環境、文化環境の中で、文化研究・文学研究の進むべき一つの方向性を示す指針であるのかもしれない。



写真2 名古屋大学におけるコスプレに関するシンポジウムの様子（2009年8月3日）